

宋初の詩風をどう見るか — 歐陽脩の視点 —

湯 浅 陽 子

【要旨】

北宋初期から継承されていた詩の作風と文体の両面において大きな変革を成し遂げ、その結果、その後の宋代文学の流れを決定付けた歐陽脩における宋初の詩風に対する態度について、主に『六一詩話』の記述により検討する。歐陽脩は、『六一詩話』執筆時にはすでに廃れていた晩唐期の詩人の作風を正面から否定することはなく、むしろ少年時代を思い出させる懐かしいものとして捉え、晩唐詩風のみを理解者であったことを示しているが、同時に、詩のテーマや気分が限定されるという限界をも感じていたと考えられる。

また所謂西崑体の中心人物である楊億は、秘閣という場所柄を意識し、豊富な学識を踏まえて典故や修辭の工夫を凝らし李商隱に倣った詩風により、劉筠・錢惟演とともに彼ら以前に存在した台閣の詩風である白体を意識した応酬を行い、その他の応酬参加者の作品も併せて『西崑酬唱集』を編んだと考えられる。歐陽脩はこの西崑体の故事や難解な語を多用する傾向を、学問のある者なればこそその弊害として認めつつも、それ以上の批判は加えておらず、宮廷の館閣を中心とする知的詩風としての西崑体に、晩唐体詩風の平板さやマンネリズムを克服する一つの可能性を求めたのではないかと考えられる。しかし、結果的に彼が西崑体の詩風を継承せず、盛唐期・中唐期の思潮や文学に学んだより自由な新しい詩文を模索したことは、彼が先輩たちの高い知性の凝縮であるこの西崑体の詩風にも限界を感じたということを示している。

はじめに

北宋中期の歐陽脩（一〇〇七〜一〇七二）の文学史上の位置づけとして一般的に認識されているのは、韓愈（七六八〜八二四）らをはじめとする中唐期の思考と詩文の影響を強く受け、北宋初期から継承されていた詩の作風と文体の両面において大きな変革を成し遂げ、その結果がその後の宋代文学の流れを決定付けたということだろう。歐陽脩における唐代文学受容の様相については様々な検討が可能だろうが、それと同時に、彼が彼以前の北宋初期の詩風に対してどのような態度をとっているのかという点についての検討もまた、その文学史上での役割を考察するためには不可欠なのではないだろうか。そこでここでは、『六一詩話』（清・何文煥輯『歷代詩話』中華書局 一九八一年 所収本）の記述を主な手がかりとして、宋初の詩風に対する歐陽脩の態度について、いくつかの側面から検討してみたい。

一、晩唐体・白体に対する態度

まず、歐陽脩は『六一詩話』第十一段で、晩唐期の詩風について次のように述べている。

唐之晩年、詩人無復李杜豪放之格、然亦務以精意相高。如周朴者、

構思尤艱、每有所得、必極其雕琢、故時人稱朴詩「月鍛季煉、未及成篇、已播人口。」其名重當時如此、而今不復傳矣。余少時猶見其集、其句有云、「風暖鳥聲碎、日高花影重。」又云、「曉來山鳥鬧、雨過杏花稀。」誠佳句也。

唐の晩年、詩人 復た李杜豪放の格無し、然るに亦た務めて精意を以て相ひ高む。周朴の如きは、構思すること尤も艱く、毎に得る所有れば、必ず其の雕琢を極め、故に時人 朴の詩を「月に鍛へ季に煉り、未だ篇を成すに及ばざるに、已に人口に播く」と稱す。其の名の當時に重んぜらるること此くの如し、而も今復た傳はらず。余少き時 猶ほ其の集を見しに、其の句に、「風暖かにして鳥聲碎け、日高くして花影重し」と云ふ有り、又た、「曉來りて山鳥鬧ぎ、雨過ぎて杏花稀なり」と云ふ。誠に佳句なり。

この段の冒頭で、歐陽脩は、晩唐期の詩風全体の傾向として、「詩人たちにはもはや李白・杜甫のように豪放な風格はなかったが、それでも一心に努力して高めあった。」と述べており、盛唐期の李白・杜甫の詩風を、「豪放」という共通の特性をもつものとしてひとまとめに高く評価している。彼の残した詩文や詩話の記述からは、彼の李・杜に対する見方は一様ではなく、李白をより好んだことが推測されるが、ここではひとまず、歐陽脩が晩唐期の詩風を「豪放」とは対比されるものとしてとらえていることに注意しておきたい。

この段の続く部分で晩唐期の詩風の例として挙げられているのは、周朴（生卒年未詳）である。『唐詩紀事』卷七十一、また『唐才子傳』卷九等の周朴の伝記では、嵩山の隱者であったとも、また閩中（現福建省）の仏寺に寄食したともされる。貫休（八三二〜九一一）と交遊があったが、乾符年間（八七四〜八七八）に黄巢の乱の中で殺害されたという。

歐陽脩は、この周朴の詩風の特徴が苦吟による彫琢にあるとし、彼が長い時間を掛けて詩句の彫琢を重ねることは、その生前からよく知られていたと記している。唐・張爲『詩人主客圖』（丁福保輯『歷代詩話續編』中華書局 一九八三年）の「清奇僻苦」の条は、陳陶・周朴を「主」孟郊に次ぐ「上入室」に挙げ、また林嵩「周朴詩集序」（全唐文卷八百二十九）は、「一篇一詠、膾炙人口。」（一篇一詠、人口に膾炙す。）と記しており、晩唐期には苦吟型の詩人としてよく知られた人物であったと推測される。さらに歐陽脩は、年少の頃にはまだ周朴の詩集を目にしたと述べているが、眞宗景德四年（一〇〇七）生まれの歐陽脩の年少期なので、おおむね眞宗大中祥符年間（一〇〇八〜一〇一六）から天禧年間（一〇一七〜一〇二一）・乾興（一〇二二）頃のことであろう。後に見るように、歐陽脩は、年少期に広く行われていた詩として別に鄭谷の詩も挙げているが、この頃までは士大夫層において、子供の教育向けも含めて晩唐期の詩がかなり広く読まれていたようだ。

さらに歐陽脩は、「誠に佳句なり。」と評して詩句を二つ挙げているが、そのうち「風暖鳥聲碎、日高花影重。」は、「春宮怨」（『全唐詩』卷六百七十三。題下に「一作杜荀鶴詩」と注す。）の頸聯であり、また「曉來山鳥鬧、雨過杏花稀。」は、『全唐詩』卷六百七十三周朴に、宋・呉昇『優古堂詩話』「穀雨杏花稀」の章段より本句のみを採録している。いずれも穏やかな風や日差し、また雨を受けた花に、さえずる鳥を配する優美な叙景句である。

この章段の内容は全体として、歐陽脩が年少期より晩唐の詩風に馴染み、またそれに対して高い評価を与えていたことを示しているが、この他にも『六一詩話』には、執筆時にはすでに廃れていた晩唐期の詩人の作風に言及した章段を見ることができる。次に第七段前半の鄭谷（八五

一頃（九一〇頃）に言及する部分を見てみよう。

鄭谷詩名、盛於唐末。號『雲臺編』、而世俗但稱其官爲鄭都官詩。其詩極有意思、亦多佳句、但其格不甚高。以其易曉、人家多以教小兒、余爲兒時、猶誦之。今其集不行於世矣。

鄭谷の詩名、唐末に盛んなり。『雲臺編』と號するも、世俗は但だ其の官を稱して鄭都官の詩と爲すのみ。其の詩は極めて意思有り、亦た佳句多し、但だ其の格は甚だしくは高からず。其の曉り易きを以て、人家多く以て小兒に教へ、余の兒爲りし時、猶ほ之を誦んず。今 其の集 世に行はれず。

この章段は、鄭谷が唐末において既に詩人としての名声を得ていたと述べているが、同様の言及は、他に齊己「寄鄭谷郎中」（全唐詩卷八百三十九）の、「高名喧省闈、雅頌出吾唐」（高名 省闈に喧しく、雅頌吾唐より出づ）等にも見ることが出来る。もっともこれは鄭谷自身に寄せた詩であり、当時の社会における鄭谷に対する評価の真情を伝えていない恐れはあるが、いくらか割り引いても、詩人としてある程度の評価を得ていたと言えよう。

この段で歐陽脩は、さらに鄭谷の詩について、非常に趣があり優れた句が多いが、その風格はそれほど高くないと評し、平易さゆえに家庭で子どもに教えられ、彼自身の子どもの頃にもまだ暗唱したとも述べている。歐陽脩の少年時代から、その晩年の神宗熙寧年間（一〇六八—一〇七七）の初めまでの間に、流行の詩風は、典故を多用する詩風のため制作者に豊かな知識を求める西崑体へ、さらに歐陽脩自身もその流行の中心にいた、中唐期の詩文の影響を強く受けた詩風へと次々に移り変わっていったのであり、歐陽脩および彼の世代の文人たちにとって、鄭谷や先に見た周朴の詩は、少年時代を思い出させる懐かしさを感じさせるも

のなのだろう。彼らの志向する詩風は、鄭谷・周朴のものからはずいぶん離れてしまっただろうが、かといってそれらを正面から否定しようとはしていないようだ。

また、歐陽脩の『六一詩話』を継いで著された司馬光（一〇一九—一〇八六）『温公續詩話』、さらに劉攽（一〇二二—一〇八八）『中山詩話』にも、鄭谷詩を取り上げる章段があるが、いずれも鄭谷の詩が広く読まれていることに触れたものであり、その詩風を批判するものではない。特に『温公續詩話』（歴代詩話本）の、「鄭工部詩有『杜曲花香醴似酒、灞陵春色老於人』、亦爲時人所傳誦、誠難得之句也。」（鄭工部の詩に「杜曲の花香は醴くして酒の似く、灞陵の春色は人よりも老ゆ」有り、亦た時人の傳誦する所と爲る、誠に得難きの句なり。）は、鄭谷の詩句を佳句として積極的に評価するものである。

鄭谷詩を通俗性という点から批判するのは、むしろ後世において強まる傾向であり、神宗元豐四年（一〇八一）生まれ（郭紹虞『宋詩話考』（中華書局 一九七九年初版）の考証による。）の周紫芝『竹坡詩話』（歴代詩話本）には、このような評が現れる。

鄭谷「雪」詩、如「江上晚來堪畫處、漁人披得一蓑歸」之句、人皆以爲奇絶、而不知其氣象之淺俗也。東坡以謂此小學中教童蒙詩、可謂知言矣。然谷亦不可謂無好語、如「春陰妨柳絮、月黑見梨花」、風味固似不淺、惜乎其不見賞于蘇公、遂不爲人所稱耳。

鄭谷「雪」詩の、「江上 晚來 畫くに堪ふる處、漁人 披き得て一蓑歸る」の句の如きは、人皆な以て奇絶と爲すも、其の氣象の淺俗なるを知らざるなり。東坡 以謂らく 此れ小學中に童蒙に教ふる詩なりと、知言と謂ふべし。然るに谷は亦た好語無しと謂ふべからず、「春陰 柳絮を妨げ、月黒 梨花を見はず」の如きは、風味

固より淺からざるが似く、惜しむらくは其の蘇公に賞められず、遂に人の稱する所と爲らざることのみ。

ここでは、鄭谷「雪」詩のある句について、世間で評価が高いのはその気象が淺はかであることが分かかっていないためだと批判している。鄭谷の詩風に批判的な意見を示した人物として想起されているのは、蘇軾（一〇三六〜一一〇一）だが、その子どもにも教えることに言及する評には、先に見た『六一詩話』の表現との類似も指摘でき、これを意識している可能性もあるだろう。

鄭谷詩を通俗性という側面から批判的に捉える態度は、葉夢得（一一〇七〜一一四八）『石林詩話』巻上（歴代詩話本）の次の記述にも現れている。

「開簾風動竹、疑是故人來。」與「徘徊花上月、空度可憐宵。」此兩聯雖見唐人小說中、其實佳句也。鄭谷詩「睡輕可忍風敲竹、飲散那堪月在花。」意蓋與此同。然論其格力、適堪揭酒家壁、與市人書扇耳。

「簾を開きて 風は竹を動かし、疑ふらくは是れ故人の來たるかと。」と「徘徊す 花上の月、空しく度る 可憐の宵。」と、此の兩聯唐人小説中に見ゆと雖も、其れ實に佳句なり。鄭谷詩「睡り軽くして 風の竹を敲くを忍ぶべく、飲むこと散にして 那ぞ堪えん月の花に在るに。」の意は蓋し此と同じからん。然るに其の格力を論ずるに、適に酒家の壁に掲ぐると、市人の扇に書するとに堪ふるのみ。

ここで引かれている「開簾風動竹、疑是故人來。」（李益「竹窓聞風寄苗發司空曙」(全唐詩卷二百八十三)「簾風」作「門復」。)及び「徘徊花上月、空度可憐宵。」(出典未詳)は、いずれも庭先の竹に吹きつける風、

花を照らす月といった、やさしく心地よい自然物からなる情景を描いたものである。筆者はこのような気分や情景を鄭谷の詩句と類似するものだと指摘しているが、それには、「格力」という面から言うならば、ちょうど飲み屋の壁に掲げたり、市井の人の扇に書いたりするのに相応しい、つまり通俗的なものに過ぎないという保留が付されている。葉夢得は同じ『石林詩話』巻下のなかで、「鄭谷『亂飄僧舍茶煙濕、密灑歌樓酒力微。』非不去體物語、而氣格如此其卑。」（鄭谷『亂れて僧舎に飄りて茶煙濕り、密に歌樓に灑して 酒力微かなり。』は、體物の語を去らざるに非ずして、氣格は此くの如く其れ卑し。）とも述べ、北宋後期から南宋期にかけての時期の、鄭谷詩の通俗性を批判的に捉える評価が固まっ

ていく状況を伝えている。

なお、宋初に行われた詩風としては他に、中唐の白居易（七七二〜八四六）の詩に学ぶ所謂「白体」があり、その主要な作者として王禹偁（九五四〜一〇〇一）を挙げることができる。歐陽脩『六一詩話』で「白体」に直接言及するのは、第二段の、「仁宗朝、有數達官、以詩知名。常慕『白樂天體』、故其語多得於容易。」（仁宗朝、數達官有り、詩を以て名を知らる。常に「白樂天體」を慕ひ、故に其の語 容易に於いて多くを得。）のみであり、ここでは王禹偁が眞宗咸平四年（一〇〇一）に没した後の仁宗期（一〇二二〜一〇六三）のこととして、高位の者のなかに白体を好んで容易な語を用いて詩を制作する者がいたと記している。また白体の作者のひとりである李昉（九二五〜九九六）については、第二段で宋太祖の挽歌詞に関わって言及しているが、白体の詩風との関わりには触れていない。

二、九僧詩に対する批評

北宋初期に広く行われた晩唐風の詩の制作者としては、これまでに見た鄭谷・周朴らのほか、九僧を中心とした詩僧たちをも挙げておくべきだろう。『六一詩話』の中には、特に北宋初期の僧侶、特に詩僧に言及した章段が存在する。当該の第九段は次の通りである。

國朝浮圖、以詩名於世者九人、故時有集、號『九僧詩』、今不復傳矣。余少時聞人多稱之。其一曰惠崇。餘八人者、忘其名字也。余亦畧記其詩、有云、「馬放降來地、鵬盤戰後雲。」又云、「春生桂嶺外、人在海門西」。其佳句多類此。其集已亡、今人多不知有所謂九僧者矣、是可歎也。當時有進士許洞者、善爲詞章、俊逸之士也。因會諸詩僧分題、出一紙、約曰、「不得犯此一字。」其字乃山・水・風・雲・竹・石・花・草・雪・霜・星・月・禽・鳥之類、于是諸僧皆闕筆。洞咸平三年進士及第、時無名子嘲曰、「張康渾裏馬、許洞鬪裝妻」者是也。

國朝の浮圖、詩を以て世に名ある者九人、故に時に集有り、『九僧詩』と號す、今復た傳はらず。余少き時人の多く之を稱ふるを聞く。其の一を惠崇と曰へり。餘の八人は、其の名字を忘るるなり。余亦た畧ぼ其の詩を記ゆるに、「馬は放つ降來の地、鵬は盤す戰後の雲」と云ひ、又「春は生ず桂嶺の外、人は在り海門の西」と云ふ有り。其の佳句は多く此に類す。其の集已に亡び、今人多く所謂の九僧なる者有るを知らず、是れ歎くべきなり。當時進士許洞なる者有り、善く詞章を爲し、俊逸の士なり。諸詩僧の題を分かつに會するに因りて、一紙を出し、約して曰く、「此の一字を犯すを得ざれ」と。其の字は乃ち山・水・風・雲・竹・石・花・草・

雪・霜・星・月・禽・鳥の類なり、是に于いて諸僧は皆な筆を闕す。洞は咸平三年の進士及第にして、時に無名子嘲りて「張康渾裏の馬、許洞鬪裝の妻」と曰ふ者は是れなり。

ここでも歐陽脩は幼時を回想し、人が「九僧」のひとりである惠崇（生卒年未詳）を褒めるのを耳にしたと記している。既に見たように晩唐風の詩が広く好まれていた当時においては、その詩風を継承する「九僧」の詩作もまた人々に好まれたのだが、ほどなくその志向は廃れ、彼らの詩作を集めた『九僧詩』も彼らの名前も忘れられていったという。なお、ここで不明とされている詩僧八人を含む九僧の全員の名、「劍南希畫・金華保暹・南越文兆・天台行肇・沃州簡長・貴城惟鳳・淮南惠崇・江南宇昭・峩眉懷古」を、司馬光が『温公續詩話』のなかで補足していることは、比較的良好に知られているだろう。

歐陽脩は「九僧」を知らない「今人」のために、記憶のなかからその「佳句」の例を取り出し、二つの対句——前者は釋宇昭「塞上贈王太尉」（全宋詩卷一百二十六・増廣聖宋高僧詩選 前集）の頷聯、後者は釋希畫「懷廣南轉運陳學士狀元」（全宋詩卷一百二十五・同上）の頷聯——を示している。「佳句」という語を用いていることから明らかのように、歐陽脩は九僧の詩風に対しても、特に否定的な態度を表してはいない。この章段の後半には許洞（生卒年未詳）と詩僧たちの逸話が引用されているが、これは詩僧の晩唐風の作詩に対して彼が抱いていたイメージにふさわしいものとして、想起されたものだろう。「山・水・風・雲・竹・石・花・草・雪・霜・星・月・禽・鳥之類」の文字の使用を禁止されると詩が作れないということは、詩僧の晩唐風の作詩のひとつの特質を示すものだが、同時にその限界を示すものとも言うことができる。すでに見たように歐陽脩は晩唐詩風のよき理解者であったが、同時に、詩のテー

マや気分がかなり限定されるというその限界をも感じていたからこそ、新しい詩風の模索を試みたのだろう。

『六一詩話』のなかには、これまでに見た晩唐期の個々の詩人に言及したもの以外に、その詩作の方法に言及した章段があり、そこからは歐陽脩の晩唐期の詩風に対する把握の様相を知ることができる。次にその第十二段を挙げてみよう。

聖俞嘗語余曰、「詩家雖率意、而造語亦難。若意新語工、得前人所未道者、斯爲善也。必能狀難寫之景如在目前、含不盡之意見於言外、然後爲至矣。賈島云、『竹籠拾山果、瓦餅擔石泉。』姚合云、『馬隨山鹿放、雞逐野禽栖。』等是山邑荒僻、官況蕭條、不如『縣古槐根出、官清馬骨高。』爲工也。」余曰、「語之工者固如是。狀難寫之景、含不盡之意、何詩爲然。」聖俞曰、「作者得於心、覽者會以意。殆難指陳以言也。雖然、亦可畧道其髣髴。若嚴維『柳塘春水漫、花塢夕陽遲。』則天容時態、融和駘蕩、豈不如在目前乎。又若溫庭筠『雞聲茅店月、人跡板橋霜。』賈島『怪禽啼曠野、落日恐行人。』則道路辛苦、羈愁旅思、豈不見於言外乎。」

聖俞 嘗て余に語りて曰く、「詩家 意を率すと雖も、語を造るこ
と亦た難し。若し意新たに語工みに、前人の未だ道はざる所を得れば、斯 善爲るなり。必ず能く寫し難き景を状りて目前に在る如からしめ、不盡の意を含めて、言外に見せば、然る後に至れりと爲す。賈島云へらく、『竹籠もて山果を拾ひ、瓦餅もて石泉を擔ふ』と。姚合云へらく、『馬は山鹿に隨ひて放ち、雞は野禽を逐ひて栖む』と。等しく是れ山邑の荒僻、官況の蕭條をいふも、『縣古くして槐根出で、官清くして馬骨高し。』の工爲るに如かざるなり」と。余曰く、「語の工みなる者は固より是の如し。寫し難き景を状り、不

盡の意を含むるは、何れの詩か然りと爲さん」と。聖俞曰く、「作者は心に得、覽る者は會するに意を以てす。殆んど指陳して以て言ふは難きなり。然りと雖も、亦た畧ぼ其の髣髴を道ふべし。嚴維の『柳塘春水漫に、花塢夕陽遲し。』の若きは則ち天容時態、融和し駘蕩として、豈に目前に在るに如かざらんや。又た温庭筠の『雞聲茅店の月、人跡板橋の霜。』賈島の『怪禽曠野に啼き、落日 行人をして恐れしむ。』の若きは則ち道路の辛苦、羈愁の旅思、豈に言外に見れざらんや」と。

この章段は、筆者との対話の記録という形式で梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）の詩論を伝えている。しかし、ここには梅堯臣の考え方に対する筆者の反論は記されていないので、この詩論は筆者の考えにも沿ったものであると考えてよいだろう。

ここで梅堯臣は、優れた詩の要件を二段階に区分し、まず第一の段階として、「新たな意と巧みな語を用い、前人がまだ言っていないことを表現」することを挙げ、さらにこれよりも高度な究極の段階として、「描写しにくい情景をさながら目の前にあるかのように言い表し、そこに言い尽くし得ない心を含めて、言外に表現」することを挙げている。次にそれぞれの例句を示し、前者については、賈島「竹籠拾山果、瓦餅擔石泉。」（題皇甫荀藍田廳）（全唐詩卷五百七十二）領聯・姚合「馬隨山鹿放、雞雜野禽棲。」（武功縣中作三十首）其一（全唐詩卷四百九十八）三・四句を、後者については、嚴維「柳塘春水漫、花塢夕陽遲。」（酬劉員外見寄）（全唐詩卷二百六十三）頸聯・温庭筠「雞聲茅店月、人迹板橋霜。」（商山早行）（全唐詩卷五百八十一）領聯・賈島「怪禽啼曠野、落日恐行人。」（暮過山村）（全唐詩卷五百七十三）領聯を挙げている。

ここで注意しておきたいのは、梅堯臣が心と詩の表現との関係の理想を達成した例として示している詩句が、嚴維のものを除いてすべて晩唐期の詩句であるということである。このような例句の示し方は、梅堯臣自身の詩作もまた、これら晩唐期の詩に多くを学んでいることを示すものであろう。例句として挙げられている詩の作者のなかには、実際の活動期間としては中唐期に分類される賈島（七八八〜八四三）が含まれているが、賈島は、晩唐詩を範とした詩作を行う際に理想としてしばしば掲げられ、晩唐風詩作の中心的存在として把握されている。また引用されている詩句の多くが枯れた気分を持ち、先掲の九僧詩について記す章段に挙げられていた、「山・水・風・雲・竹・石・花・草・雪・霜・星・月・禽・鳥之類」を多く含んでいることも、彼らが晩唐風の詩作をどのように把握していたのかを示している。

また、この章段で梅堯臣は、優れた詩の要件として、「新たな意と巧みな語を用い、前人がまだ言っていないことを表現」することを挙げ、さらにも高度な段階として、「描写しにくい情景をさながら目の前にあるかのように言い表し、そこに言い尽くし得ない心を含めて、言外に表現」することを挙げているが、同様の表現は次に挙げる梅堯臣自身の「林和靖先生詩集序」（梅堯臣集編年校注拾遺 上海古籍出版社 二〇〇六年 新一版）にも、見ることができるといえる。

其順物玩情爲之詩、則平澹遼美、讀之令人忘百事也。其辭主乎靜正、不主乎刺譏、然後知趣尚博遠、寄適於詩爾。

其れ物に順ひ情を玩びて之を詩に爲れば、則ち平澹遼美にして、之を讀むに人をして百事を忘れしむるなり。其の辭は靜正を主とし、刺譏を主とせず、然る後に趣尚博遠にして、適を詩に寄するを知るのみ。

北宋初期に鶴と梅を友として西湖孤山に隱棲した林逋（九六七〜一〇二八）もまた、晩唐風の詩作をした人であるが、ここではその詩の表現を「落ち着いた端正さを主とするもの」と表現している。歐陽脩と同様の態度は梅堯臣らにも共有されており、仁宗期の知識人の晩唐詩風に対する態度の基調となるものと考えることができるとはいえないだろうか。

三、西崑体の視線

ここまで、歐陽脩を中心とした仁宗期の知識人層における、晩唐詩およびそれを継承する詩風に対する態度や把握のしかたについて検討してきた。しかし、周知の通り北宋初期から中期にかけての時期には、晩唐風の詩風の流行のすぐ後に歐陽脩らによる盛唐・中唐期の影響をより強く受けた詩風が展開されたのではなく、両者の間には楊億・劉筠・錢惟演らを中心とする西崑体詩風の大きな流行が存在したのであり、北宋期における詩風の形成の状況について検討するためには、この西崑派の人々の自己の詩風ならびに彼ら以前の宋初の詩風に対する意識についても検討しておく必要があるだろう。

まず、西崑体の中心人物と目される楊億（九七四〜一〇二〇）の「西崑唱集序」（西崑唱集 四部叢刊本）の記すところから、彼が西崑体の詩風をどのように認識しているのかを考えてみたい。

余景德中、忝佐脩書之任、得接羣公之遊。時今紫微錢君希聖・祕閣劉君子儀、並負懿文、尤精雅道、雕章麗句、膾炙人口、予得以遊其墻藩、而咨其模楷。二君成人之美、不我遐棄、博約誘掖、寘之同聲。因以歷覽遺編、研味前作、挹其芳潤、發於希慕、更迭唱和、互相切劘。而予以固陋之姿、參訓繼之末、入蘭游霧、雖獲益以居多、觀海

學山、嘆知量而中止、既恨其不至、又犯乎不韙。雖榮於託驥、又愧乎續貂間。然於茲顏厚何已。凡五七言律詩二百四十七章、其屬而和者又十有五人、析爲二卷、取玉山策府之名、命之曰、『西崑酬唱集』云爾。

余 景德中、脩書の任を佐くるを忝くし、羣公の遊に接するを得。時に今の紫微錢君希聖・祕閣劉君子儀、並びて懿文を負ひ、尤も雅道に精しく、雕章麗句は、人口に膾炙するに、予 以て其の墻藩に遊び、而して其の模楷に容るを得。二君成人の美、我を遐棄せず、博約に誘掖し、之を同聲に賞く。因りて以て遺編を歴覽し、前作を研味し、其の芳潤を挹み、希慕より發して、更迭に唱和し、互相に切劘す。而して予は固陋の姿を以て、訓繼の末に參じ、蘭に入り霧に遊び、益を獲ること以て居多なると雖も、海を觀て山を學び、量を知して中止するを嘆き、既に其の至らざるを恨み、又た不韙を犯す。驥に託すを榮とすると雖も、又た續貂の間に愧ず。然るに茲に於いて顏厚なること何ぞ已めんや。凡そ五七言律詩二百四十七章、其の屬して和する者は又十有五人なり。析して二卷と爲し、玉山策府の名を取り、之に命けて曰く、『西崑酬唱集』と云ふのみ。

ここで楊億が、「眞宗景德年間（一〇〇四〜一〇〇七）に、書物編集の補佐役を拝命した際」としているのは、具体的には景德二年（一〇〇五）に眞宗の命を受けて開始された『歴代君臣事迹』一千卷の編修を指している。周知の通り、この書物は大中祥符六年（一〇一三）に完成した後、眞宗から『冊府元龜』という書名を与えられている。景德二年当時、右司諫・知制誥であった楊億は、刑部侍郎・資政殿學士の王欽若（？〜一〇二五）とともに編纂に従事したが、そのなかで、「肩をならべて優れた文章を担い、とりわけ正しくみやびやかな事に精通しており、模

様を彫り刻んだような文章や美しい語句が、人口に膾炙していた」錢惟演（九六二〜一〇三四）・劉筠（九七〇〜一〇三〇）と交遊を結び、彼らの導きや助けを得て詩を応酬し互いに切磋琢磨したという。

彼らを中心として応酬された五・七言律詩、実際には二百五十首のうち、楊億作が七十六首、劉筠作が七十首、錢惟演作が五十五首あり、その大半を占めていることに注意すべきであろう。『歴代君臣事迹』編修の場である宮中の秘閣を、西王母の住む崑崙山の西にある玉山の書庫になぞらえた『西崑酬唱集』という名付けからは、楊億をはじめとする応酬に参加した人々の、国家の知的な財産を蔵する特別な場所としての秘閣に対する意識や、そこでの書物の編纂に携わっている知識人としての自負や矜持をとらえることができるだろう。

この序のなかで楊億が、詩の応酬を行ったのは彼らのほか十五人であると述べているように、この『西崑酬唱集』に収められている応酬詩の作者は、錢惟演・劉筠・楊億・李宗諤・陳越・李維・劉鷗・丁謂・刁衍・元闕（名を欠くの意）・任隨・張詠・錢惟濟・舒雅・晁迥・崔遵度・薛映・劉秉の十八名である。これらの応酬者の構成については、すでに曾棗莊氏が「『西崑酬唱集』的作家群」（『文學遺產』一九九三年第六期。後に同氏『唐宋文學研究』巴蜀書社 一九九九年に収。）第一章で指摘されており、これによるならば、『歴代君臣事迹』の編修スタッフのうち、王欽若・杜鎬・戚綸・王希逸・陳彭年・姜嶼・宋貽序・夏竦・孫奭らは応酬に参加しておらず、また応酬の参加者のうち大部分を占める錢惟濟・丁謂・李宗諤・晁迥・任隨・崔遵度・劉鷗・薛映・張詠・劉秉・舒雅は、『歴代君臣事迹』の編纂に参加しておらず、『西崑酬唱集』の応酬者のうち名前が明らかでない十七人は、応酬の行われた三年の間に皆が秘閣に在職したわけではなく、また皆が首都汴京にいたわけでもないとい

うことである。つまり、『西崑酬唱集』は、宮中の秘閣で『歴代君臣事迹』（『冊府元龜』）の編修に携わった人々が応酬した詩を集めたものであるという言い方は、かなり大雑把なものでしかなく、必ずしも実際の状況に即してないということになるだろう。しかし、見方を換えれば、『歴代君臣事迹』の編修に参加していない人物、この時期に秘閣に在職しなかった人物、またこの時期に汴京にいなかった人物が、『西崑酬唱集』の全応酬詩中に占める割合は少ないとはいえ、応酬者の数としてはその多数を占めているということは、いわゆる「西崑体」という詩風が、『歴代君臣事迹』の編修スタッフだけに止まらず、より広範に拡大していたことを示すものだとも言うことができるだろう。

このような状況に照らすならば、先に挙げた序文は、『歴代君臣事迹』の編修スタッフであり、かつ『西崑酬唱集』の応酬者であるという立場の楊億であればこそ書きえたものと言うことができる。ここで錢・劉の詩風の特徴とされ、楊億自身がそれに学んだとしている「雕章麗句」が、彫琢を加え美しさを追求するという、後人の言う西崑体詩風の特徴にそのまま当てはまるものであることは言うまでもないが、それはつまり、西崑体の人々というよりも楊億及び劉筠・錢惟演が、自分たちの志向する詩風の特徴を、文章表現を彫琢し、華麗な句を作ることにであると認識していたことを示しているのだろう。

楊億はこのように『西崑酬唱集』の応酬者のうち、劉筠・錢惟演を特に自らと詩作の志向を同じくする仲間として意識していたと思われるが、楊億の『楊文公談苑』には、このようなとらえ方を補強する資料を見ることができると述べている。この著者は、楊億の口述したものを黄鑑（生卒年未詳）眞宗大中祥符八年（一〇一五）進士、至通判蘇州。）が筆録し、さらに宋庠（九六〇—一〇六六 祁の兄）が整理したとされるものである。な

お、上海古籍出版社「宋元筆記叢書」一九九三年刊行の李裕民氏輯校『楊文公談苑』では、第二百段から第二百二十二段にかけて、『類苑』卷三十七より輯した、「雍熙以來文士詩」・「錢惟演劉筠警句」・「近世釋子詩」の三章段を設けているが、それぞれの章段は、いずれも冒頭で楊億による論評を記した後、各々の詩人の秀れた対句の何首かずつを示す形式を用いている。なお、このように秀句を二句一組で引用する形式には、晩唐期の詩論書、例えば張爲『詩人主客圖』、齊己『風騷旨格』等との類似を指摘することができるが、『楊文公談苑』のこのような章段を、これらの詩格を説く書物から、歐陽脩以降の詩話という形式の詩論書へという流れのなかに位置づけることもできるのではないだろうか。

その『楊文公談苑』のうち、百二十一一段の「錢惟演劉筠警句」は、まず冒頭で、「近年錢惟演・劉筠首變詩格、學者爭慕之、得其標格者、蔚爲嘉詠。」（近年錢惟演・劉筠 始めて詩格を變じ、學ぶ者 争ひて之を慕ひ、其の標格を得る者、蔚として嘉詠を爲す。）と、彼らが始めた新しい詩風が、詩作する者たちから大きな支持を受け、その品格を会得した者が盛んに優れた作品を制作したと述べているが、先に見たことと考え合わせるならば、彼ら三人を中心とする『西崑酬唱集』に応酬詩を寄せたその他の人々は、この「争ひて之を慕ひ、其の標格を得る者」の筆頭ということになるだろうか。

『楊文公談苑』のこの章段はさらに、「二君麗句絶多」、「二君 麗句絶多にして」と述べた後、例句を大量に列挙し、錢惟演については「奉使塗中」の「雪意未成雲著地、秋聲不斷鴈連天。」（雪意未だ成らずして雲は地に著き、秋聲断たずして鴈は天に連なる。）以下全二十七首を、また劉筠については「禁直」の「雨勢宮城闊、秋聲禁樹多。」（雨勢宮城闊く、秋聲 禁樹多し。）以下全四十八首を挙げ、「其警句絶多、此

但所記者耳。」（其の警句 絶多にして、此れ但だ記す所の者なるのみ。）と述べてこの章段を閉じている。紙幅の制限もあるので、ここでは個々の引用句の検討は差し控えるが、このような論評のしかたと大量の秀句例の列挙からも、楊億の錢惟演と劉筠の詩作に対する高い評価をとらえることができるだろう。

『楊文公談苑』にはまた、第二百十段「雍熙以來文士詩」に、北宋初期の詩風についての楊億の口述を記録しており、その冒頭の論評部分は以下のとおりである。

公言、自雍熙初歸朝、迄今三十年、所聞文士多矣、其能詩者甚鮮。如侍讀兵部、夙擅其名、而徐鉉・梁周翰・黃夷簡・范杲皆前輩。鄭文寶・薛映・王禹偁・吳淑・劉師道・李宗諤・李建中・李維・姚鉉・陳堯佐、悉當時儕流。後來之聲者、如路振・錢熙・丁謂・錢易・梅詢・李拱・蘇爲・朱嚴・陳越・王曾・李堪・陳詒・呂夷簡・宋綬・邵煥・晏殊・江任・焦宗古。布衣有錢塘林逋・縉雲周啓明。錢氏諸子有封守惟濟・供奉官昭度。鄉曲有今南鄭殿丞兄故黎州家君、及高安簿覺宗人字牧之子。並有佳句、可以摘舉。而錢惟演・劉筠特工於詩、其警策殆不可遽數。自兵部而下、公之所嘗舉、今略記之。

公言へらく、雍熙に初めて朝に歸してより、今まで三十年、聞く所の文士多きも、其の詩を能くする者は甚だ鮮なし。侍讀兵部の如きは、夙に其の名を擅にし、徐鉉・梁周翰・黃夷簡・范杲は皆な前輩なり。鄭文寶・薛映・王禹偁・吳淑・劉師道・李宗諤・李建中・李維・姚鉉・陳堯佐、悉く當時の儕流なり。後來の聲者は、路振・錢熙・丁謂・錢易・梅詢・李拱・蘇爲・朱嚴・陳越・王曾・李堪・陳詒・呂夷簡・宋綬・邵煥・晏殊・江任・焦宗古の如し。布衣に錢塘の林逋・縉雲の周啓明有り。錢氏の諸子に封守の惟濟・供奉官の昭

度有り。郷曲に今の南鄭殿丞兄故黎州家君、及び高安簿覺宗人 字牧之の子有り。並しく佳句有り、以て摘舉すべし。而して錢惟演・劉筠は特に詩に工みにして、其の警策は殆んど數ふるに遑あるべからず。兵部より下りては、公の嘗て擧ぐる所にして、今 略ぼ之を記す。

ここで楊億は、彼が五代間から宋朝に帰順した雍熙年間（九八四〜九八七）以降の三十年間に耳にした文士のうち、詩作に秀でた者の名を列挙している。ここでは「前輩」として、侍讀兵部（未詳）・徐鉉・梁周翰・黃夷簡・范杲を、「悉當時儕流」として同世代の仲間として、鄭文寶・薛映・王禹偁・吳淑・劉師道・李宗諤・李建中・李維・姚鉉・陳堯佐を、さらに「後來之聲者」として評判の高い後輩として、路振・錢熙・丁謂・錢易・梅詢・李拱・蘇爲・朱嚴・陳越・王曾・李堪・陳詒・呂夷簡・宋綬・邵煥・晏殊・江任・焦宗古を、また「布衣」として無官の人として、林逋・周啓明を、五代吳越から宋に帰順した「錢氏諸子」として、錢惟濟・錢昭度を、「郷曲」として郷里の閭の詩人として、今南鄭殿丞兄故黎州家君（未詳）・高安簿覺宗人字牧之子（未詳）をそれぞれ挙げている。ここに挙げられた人のなかには、『西崑酬唱集』の応酬者である薛映・李宗諤・李維・丁謂・陳越・錢惟濟も含まれており、また白体の主要な作者とされる王禹偁や、一般的には晚唐体の詩人に分類される林逋の名前も見えている。

また百二十二段では、「近世釋子詩」について同様の体裁を用いて述べ、その冒頭では、

公常言、近世釋子多工詩、而楚僧惠崇・蜀僧希畫爲傑出。其江南僧元淨・夢眞、浙右僧寶通・守恭・行肇・鑿微・簡長・尚能・智仁・休復、蜀僧惟鳳、皆有佳句。

公常に言へらく、近世の釋子 詩に工みなるもの多くして、楚僧惠崇・蜀僧希晝を傑出と爲す。其の江南僧元淨・夢眞、浙右僧寶通・守恭・行肇・鑿微・簡長・尚能・智仁・休復、蜀僧惟鳳は、皆な佳句有り。

と記している。つまりこの『楊文公談苑』での楊億は、基本的に宋初からの詩作に優れた人物を、在俗の知識人である「文士」と出家者の「釋子」に二分しているのであり、そのうえで『西崑酬唱集』の応酬者のうち、劉筠・錢惟演だけをそれらの範疇とは別立てにして論じていると考えることができる。おそらく楊億にとって劉・錢の二人は、自らと詩の志向をともにする特別な仲間として意識されているのであろう。『西崑酬唱集』のその他の応酬者の一部は、その詩作を評価されて「雍熙以來文士詩」、つまり宋初以来の知識人の詩という範疇に入れて論じられており、いわゆる白体と晩唐体とは区別されていない。このように考えるならば、楊億が先に見た「西崑酬唱集序」で述べていた詩の志向をともにする者、いわば純粹な西崑体として意識していたのは、劉筠・錢惟演及び自分の三人だけなのではないかとも思われる。

このような『西崑酬唱集』の応酬者のすべてが西崑体詩風に属するわけではないという考え方は、すでに前に挙げた曾棗莊氏「《西崑酬唱集》的作家群」の第三・四・五章でも示されており、曾氏はそこで、「文論主張」と「詩文風格」の二つの点から、『西崑酬唱集』の応酬者は、最も代表的な楊億・劉筠・錢惟演と、北宋古文運動の著名な先駆者である王禹偁のグループに属すとすべき張詠・丁謂、及び白体詩人である晁迥の三つに分けることができると指摘され、またその他の詩人については、残されている詩文がとも少ないので無理にカテゴライズするに及ばないと考えられている。

曾氏の分類のうちの王禹偁（王黄州）は、蔡啓『蔡寬夫詩話』（郭紹虞『宋詩話輯佚』下冊）に「國初沿襲五代之餘、士大夫皆宗白樂天詩、故王黄州盟一時。」（國初 五代の餘を沿襲し、士大夫 皆な白樂天詩を宗び、故に王黄州 一時に盟たり。）と指摘されるように、宋初における白体の主要な作者と見なされる人物であるので、結局、西崑体は、中心となる楊・劉・錢の三名に白体に親しんだ人々を加えて成り立ったものであるとも考えられるのではないだろうか。この点について、曾祥波氏「『西崑體』之重新探索與評價」（《從唐音至宋調——以北宋前期詩歌爲中心》第四章 昆命出版社 東方文化集成 二〇〇六年）は、「『西崑體』の相当多作品只是『白體』在藝術上更脫俗、更精美的形態。」（『西崑體』の相当多数の作品は、『白體』の芸術の面でさらに脱俗し、さらに精密で美しくなった姿である。）と指摘され（二八九頁）、また、赫廣霖氏「西崑體」（《宋初詩派研究》第四章 齊魯書社 二〇〇八年）も、「由于西崑詩人多從白體入、故其創作不免染上白體的色彩。」（西崑体の詩人は白体から入った者が多いため、その作品は白体の色に染まることを逃れ得ない。）と指摘されている（一四四頁）。

宋初のいわゆる「白体」の詩風は、主に館閣等に在職する高位の官僚のなかで流行したものであり、李昉（九二五〜九九六）・李至（九四七〜一〇〇一）の『二李唱和集』のように、白居易が友人との間で行った『劉白唱和集』等の応酬詩の制作を模倣することがあるが、この『西崑酬唱集』の応酬も本来は白居易を意識したものである可能性はあるだろう。

つまるところ楊億は、秘閣という場所柄を意識し、豊富な学識を踏まえて典故や修辭の工夫を凝らし李商隱に倣った詩風により、劉筠・錢惟演とともに彼ら以前に存在した台閣の詩風である白体を意識した応酬を

行い、その他の応酬参加者の作品も併せて『西崑酬唱集』を編んだのではないだろうか。

四、西崑体に対する態度

それでは、歐陽脩はこの西崑体をどのようにとらえているのだろうか。歐陽脩の西崑体に対する態度を考えるための資料として、まず挙げるべきは、『六一詩話』第八段の次の記述であろう。

陳舍人從易、當時文方盛之際、獨以醇儒古學見稱、其詩多類白樂天。蓋自楊・劉唱和、『西崑集』一行、後進學者爭效之、風雅一變、謂之西崑體、由是唐賢諸詩集、幾廢而不行。陳公時偶得杜集舊本、文多脫誤、至「送蔡都尉詩」云、「身輕一鳥」、其下脫一字。陳公因與數客各用一字補之。（以下略）

陳舍人從易、時文の方に盛んなるの際に當たり、獨り醇儒古學を以て稱せられ、其の詩 多く白樂天に類す。蓋し楊・劉唱和、『西崑集』行れてより、後進の學者爭ひて之に效ひ、風雅一變し、之を西崑體と謂ひ、是より唐賢の諸詩集、幾んど廢れて行はれず。陳公時に偶ま杜集の舊本を得るに、文 脱誤すること多し、「送蔡都尉詩」（送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記）（杜詩詳註卷三）の、「身輕一鳥」と云ふに至りては、其の下の一字を脱す。陳公 因りて數客と與に各おの一字を用いて之を補ふ。（以下略）

この章段は、陳從易（？一〇三一）の詩風と彼の杜甫詩テクストの脱字への対応のしかたについて述べたものだが、これに関わって、西崑体の流行によってそれ以前に存在した詩風が駆逐されてしまったことも言及している。ここで、西崑體の全盛期にあって自らの詩風を貫いた

人として取り上げられている陳從易は、『宋史』卷三百（中華書局本）所収の傳によれば、泉州晉江（現福建省）の人、太宗端拱二年（九八九）の進士であり、官職は龍圖閣直學士・知杭州に至ったという。

『宋史』陳從易傳では、進士及第の後、彭州軍事推官として当地への王均らの反亂軍の侵入の防禦に功績を挙げたことを記し、さらに次のように言葉を継いでいる。

賊平、安撫使王欽若以狀聞、召爲秘書省著作佐郎・大理寺詳斷官。遷太常博士、出知邵武軍。預修『冊府元龜』、改監察御史。眞宗宴近臣崇和殿、召從易預、賦詩稱旨。

賊平らぎ、安撫使王欽若 以て狀聞し、召して秘書省著作佐郎・大理寺詳斷官と爲す。太常博士に遷り、出でて邵武軍に知す。預かりて『冊府元龜』を修し、監察御史に改めらる。眞宗 近臣と崇和殿に宴するに、從易を召して預からしめ、詩を賦すに旨に稱ふ。

ここには、陳從易が王欽若の推薦を受けて『冊府元龜』（歴代君臣事迹）の編修に參與したこと、また崇和殿での応制詩が眞宗の御意になうものであったことが記されている。この『歴代君臣事迹』の編修が王欽若と楊億とを中心とするものであり、その編修の場が『西崑酬唱集』の応酬の中心であったことは前章で見たとおりであるが、この『歴代君臣事迹』の編修について、宋・程俱（一〇七八〜一一四四）『麟臺故事』卷二（張富祥校證『麟臺故事校證』中華書局 唐宋史料筆記叢刊二〇〇〇年）はまた、次のように記している。

景德二年九月、命刑部侍郎資政殿學士王欽若・右司諫知制誥楊億修『歴代君臣事迹』。欽若等奏請以太僕少卿直祕閣錢惟演・都官郎中直祕閣龍圖閣待制杜鎬・駕部員外郎直祕閣刁衍・戸部員外郎直集賢院李維・右正言祕閣校理龍圖閣待制戚綸・太常博士直史館王希逸・祕

書丞直史館陳彭年・姜嶼・太子右贊善大夫宋貽序・著作佐郎直史館陳越同編修。初命欽若・億等、俄又取祕書丞陳從易・祕閣校理劉筠及希逸卒、貽序貶官、又取直史館查道・太常博士王曙、後復取直集賢院夏竦、又命職方員外郎孫奭注撰音義。凡九年、至大中祥符六年成一千卷上之。

ほとんど官職と人名の羅列からなっている部分なので、訓読をあげることを控えるが、ここで注意したいのは、王欽若ならびに楊億が当初、同編修に任命するよう奏請したのは、錢惟演・杜鎬・刁衍・李維・戚綸・王希逸・陳彭年・姜嶼・宋貽序・陳越であり、その後「俄かにして又た陳從易・劉筠を取」ったとされていることである。つまり、この記述によれば、陳從易と劉筠とは『歷代君臣事迹』の編修が開始された後に追加されたメンバーなのである。ここでこの顔ぶれを『西崑酬唱集』に採録されている応酬詩の作者と比較してみると、編修メンバーのうち、杜鎬・戚綸・王希逸・陳彭年・姜嶼・宋貽序ならびに追加された陳從易・查道・王曙・夏竦・孫奭は応酬者に含まれていない。また、途中追加された人物のなかで『西崑酬唱集』に作品を残しているのは劉筠のみである。

また、『宋史』卷三百の陳從易傳は、後年、知制誥となったことについて、次のように記している。

初、景德後、文士以雕靡相尚、一時學者鄉之、而從易獨守不變。與楊大雅相厚善、皆好古篤行、時朝廷矯文章之弊、故並進二人、以風天下。

初め、景德の後、文士 雕靡を以て相ひ尚び、一時の學者 之を郷するに、從易 獨り守りて變へざるのみ。楊大雅と相ひ厚善たり、皆な古を好みて行ひに篤く、時に朝廷 文章の弊を矯めんとし、故

に並べて二人を進め、以て天下に風す。

ここで、眞宗景德年間（一〇〇四〜一〇〇七）以降に文士たちが巧みに表現を飾ることを尊び、当時の詩を学ぶ者はみなこれに従ったが、從易はひとり頑固に作風を變えなかった、としているのは、『六一詩話』の記述と重なるものであり、この傳の書き手が西崑派の作風に対して批判的な態度をとっていることを暗示するものと言えよう。さらにここでは、陳從易は楊大雅（九六五〜一〇三三）と親しく、二人とも古を好み、誠実な行動をする人であったので、朝廷が「文章の弊を矯め」るため、二人を一緒に登用し、遠まわしに天下を感化しようとしたのだとも述べている。歐陽脩が『六一詩話』の陳從易の詩風について述べた章段で、ことさらに彼を西崑體の全盛期にあって自らの詩風を貫いた人物として紹介しているのには、そのような背景も存在しているのではないだろうか。

『宋史』卷三百の陳從易傳の直後に置かれる楊大雅の傳には、楊大雅は進士及第し、後には兵部郎中知制誥、また集賢院學士・知亳州に至ったが、「素好學、日誦數萬言、雖飲食不釋卷。」（素より學を好み、日びに數萬言を誦し、飲食すると雖も卷を釋てず。）また、「大雅朴學自信、無所阿附、直集賢院二十五年不遷。」（大雅 朴學にして自ら信じ、阿附する所無し、集賢院に直すること二十五年にして遷らず。）とあり、陳從易が西崑體の全盛期にあって自らの詩風を貫いたのと同じく、この楊大雅もまた誠実に學問に励み、他にへつらったり周囲に流されたりすることのない人であったとされている。

陳從易らのこのような登用が「文章の弊を矯め」ることを目的としていたのならば、当時の眞宗の朝廷は、西崑體の広範な流行に対して批判的な態度をとっていたということになるだろう。眞宗が西崑體の詩風に

対して批判的な態度を示していたことを伝える資料としては、この他に文瑩（生卒年未詳。真宗期〜神宗期）『玉壺清話』巻一（中華書局 唐宋筆記叢刊 一九八四年）の次の記述をも挙げることができる。

樞密直學士劉綜出鎮并門、兩制・館閣皆以詩寵其行、因進呈。真宗深究詩雅。時方競務西崑體、磔裂雕篆、親以御筆選其平淡者、止得八聯。

樞密直學士劉綜 出でて并門に鎮たるに、兩制・館閣 皆な詩を以て其の行に寵み、因りて進呈す。真宗 詩雅を深究す。時に方に競ひて西崑體に務め、磔裂雕篆し、親ら御筆を以て其の平淡なる者を選ぶに、止だ八聯を得るのみ。

并州へ赴任して行く劉綜（九五五〜一〇一五）に対して、諸館閣の人々が賤別として贈った詩のなから、真宗が直々に平淡なものを選んだが、それは八聯に止まったという。ここでの真宗の行動は当時の西崑體の隆盛とは軌を異にするものであり、真宗が西崑體の文飾の過多に対して批判的であったことを示すものである^④。

この章段で、続いて示される当該の八聯は次のとおりである。

- 晁迥「夙駕都門曉、微涼苑樹秋。」
- 楊億「關榆漸落邊鴻過、誰勸劉郎酒十分。」
- 朱翼「塞垣古木含秋色、祖帳行塵起夕陽。」
- 李維「秋聲和暮角、膏雨逐行軒。」
- 孫僅「汾水冷光搖畫戟、蒙山秋色鏤層樓。」
- 錢惟演「置酒軍中樂、聞笳塞上情。」
- 王貽永「河朔雪深思愛日、并門春暖詠甘棠。」
- 劉筠「極目關山高倚漢、順風雕鷲遠凌秋。」

いずれの詩句もこの資料によって断句が伝わるのみで、全篇は伝わら

ない。八名のうち朱翼・孫僅・王貽永は『西崑酬唱集』収録作品の作者ではなく、西崑體詩風流行の兩制・館閣における広がりを示すものと言えよう。各々の詩句の表現を概観してみても、特に典故を意識したものととしては、王貽永の下旬が、周の召公が善政により人民の敬愛を得たことをいう『詩』「甘棠」を踏まえているくらいで、その他の詩句は出典を把握しなければ理解できないような難解なものではない。『玉壺清話』の記事はさらに、「綜後寫御選句圖立於晉祠。」（綜 後に御選句圖を寫して晉祠に立つ。）と記しているが、選ばれた詩句のなかには自然物の情景を描くものも多く含まれており、絵面化することも可能であろう。

真宗はこのように西崑體の流行の中で制作された詩のなから、特に「平淡」な対句を取り出して評価したとされているのだが、ここで再び『六一詩話』の記述と照らし合わせるならば、次に示す第二十一段に記される西崑體に対する考え方には、この真宗の態度との類似が認められるのではないだろうか。

- 楊大年與錢劉數公唱和、自『西崑集』出、時人爭效之、詩體一變。而先生老輩患其多用故事、至於語僻難曉、殊不知自是學者之弊。如子儀「新蟬」云、「風來玉宇鳥先轉、露下金莖鶴未知。」雖用故事、何害為佳句也。又如「峭帆橫渡官橋柳、疊鼓驚飛海岸鷗。」其不用故事、又豈不佳乎。蓋其雄文博學、筆力有餘、故無施而不可、非如前世號詩人者、區區於風雲草木之類、為許洞所困者也。
- 楊大年 錢・劉數公と與に唱和し、『西崑集』出でしより、時人爭ひて之に效ひ、詩體は一變す。而るに先生・老輩は其の多く故事を用ひて、語僻にして曉り難きに至るを患ひ、殊に自ら是れ學者の弊なるを知らず。子儀が「新蟬」に云ふ、「風 玉宇に來たりて 鳥は先づ轉じ、露 金莖に下るも 鶴は未だ知らず。」の如きは、故

事を用ふると雖も、何ぞ佳句たるを害はんや。又た「峭帆 横ざまに渡る 官橋の柳、疊鼓 驚きて飛ぶ 海岸の鷗。」の如きは其の故事を用ひざるも、又た豈に佳からざらんや。蓋し其の雄文博學にして、筆力餘有り、故に施して可ならざる無く、前世の詩人と號する者の、風雲草木の類に區區として、許洞の困しむ所の者と爲るが如きに非ざるなり。

この章段は、楊億（字大年）が錢惟演・劉筠らと唱和した『西崑酬唱集』が世に出てからの、模倣の盛行と詩風の大きな変化について記したもののだが、そのような風潮の中にあつて、年かさの人々、つまりそれ以前に広く行われていた晩唐を継承する詩風に馴染んだ人々は、『西崑酬唱集』の詩風が故事を多用し、詩語が偏つていて理解しにくくなっていることを批判したと述べている。先に見た眞宗の「平淡」な詩句を選び出す態度も、この流れの中にあるものではないだろうか。

しかし、歐陽脩自身は、ここで「先生・老輩」らによる批判についても言及しているものの、それに単純に同調しているわけではないことにも注意しておきたい。彼は、西崑派の「其の多く故事を用ひて、語僻にして曉り難きに至る」傾向を、学問のある者なればこそその弊害として認めつつも、それ以上の批判は加えていない。さらに故事を使用する佳句の例として劉筠（字子儀）「新蟬」詩の句を、また故事を使用しない佳句の例として、「峭帆横渡官橋柳、疊鼓驚飛海岸鷗。」（原詩未詳）を挙げ、彼らは文章に優れ博識だったので筆力に余裕があり、だから何でも可能だったのだと述べて、むしろその手腕を高く評価している。さらに末尾で、前代の詩人と呼ばれた者が、風雲草木の類に拘るばかりだと述べているのは、既に見た、九僧詩について述べる『六一詩話』第九段の言うところと重なるものであり、歐陽脩が、限られた題材に拘る狭隘さとい

う晩唐体のひとつの限界を打破する可能性を持つものとして、西崑体を位置づけようとしていることを捉えることができるのではないだろうか。歐陽脩にとつて、西崑体の主要な作者たちはひと世代前の高官たちであり、特にそのなかの錢惟演は、彼の初任である西京留守推官時代の上官として直接に接した人物である。顔見知りで世話にもなった目上の人物に対する気遣いが、その詩風に対する批評に影響している可能性は皆無とは言えないだろうが、宮廷の館閣を中心とする知的詩風としての西崑体に、歐陽脩は晩唐・五代から続く晩唐体詩風の平板さやマンネリズムを克服する一つの可能性を求めようとしたのではないだろうか。しかし、結果的に彼が西崑体の詩風を継承せず、盛唐期・中唐期の思潮や文学に学んだより自由な新しい詩文を模索したことは、彼が先輩たちの高い知性の凝縮であるこの西崑体の詩風にも限界を感じたということを示しているだろう。

【注】

- ① 眞宗が文飾の過多に対して批判的であったことを示す資料として、ほかに、李燾『續資治通鑑長編』卷七十九 眞宗大中祥符五年（一〇二二）冬十月丁未の記事、「上以宗室所進和幸諸王宮賜宴詩示輔臣、因曰、『宗親好學、大是美事。苟述作不已、自得指趣。得指趣、即忘倦矣。然當戒於好奇而尚浮靡、好奇則失實、尚浮靡則少理也。』」がある。